

上野東照宮：銅灯籠

上野東照宮の境内を歩くと、装飾を施された唐門の前や通路に背の高い灯籠が並んでいることに気づくでしょう。社殿から遠い場所に立つ灯籠はほとんどが石でできていますが、近い灯籠は銅でできています。銅の灯籠は一つを除いて全て現在の社殿が完成した 1651 年に上野東照宮に寄進されたものです。寄進したのは豊かな大名達で、彼らは徳川幕府への忠誠心を示すために、これらの大きく、非常に高価な飾りを贈ったのです。なんととっても上野東照宮は徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）を神道の神様として祀っているわけです

から。1651 年に寄進された 49 基の灯籠のうち、6 基は唐門の横という栄誉ある場所を与えられています。尾張家、紀伊家、水戸家から 2 基ずつ寄進されたものです。これらは家康の直系である徳川「御三家」で、御三家は現在の将軍に後嗣ができなかった場合に次の将軍を輩出することになっていました。

灯籠の上部は形を変える海の妖怪（蜃）から蓮の花のような仏教的造形までに至る様々なモチーフに飾られており、基部には寄進した大名の名前と位が刻まれています。基部は 8 角形で、1651 年に寄進された灯籠を、それ以前に寄進された 1 基から区別できる特徴となっています。上野東照宮が創設された年である 1627 年に、この神社を建立した藤堂高虎（1556-1630）によって寄進された円形の基部を持つ銅灯籠を見つけてみてください。

装飾目的で設置され、一度も灯りとして使われることのなかったこれらの灯籠は、1867 年に徳川幕府が倒れた後に敷地が大幅に縮小されるまでの間、何世紀にもわたって広大な神社の境内全体に散らばっていました。敷地が狭くなったことにより、灯籠は距離を詰めて並べなければなりませんでした。これらの灯籠は軍事目的で回収されて溶かされるのを防ぐために第 2 次世界大戦前に国宝に指定されましたが、それでも 2 基の灯籠が戦争中に盗まれてしまいました。残った 48 基は現在、重要文化財に指定されています。

